

# 召人について — 源氏物語読解例の一つ —

秋 山 虔

一  
この稿は、かつて発表したことのある小稿<sup>第1</sup>の補いとして書かれる。

その小稿は、源氏四十歳の「若菜上」巻において、光源氏の六条院に朱雀院上皇の女三の宮が輿入れするという事態に対して、年来光源氏の愛をほとんど独占していた、あるいは源氏といわば一身同体とさえいえそうな関係で、その栄華の生活の建設のために寄与してきた紫の上が、周囲の女房たちの穏やかなぬ取り沙汰を抑え、その心内を隠蔽して上機嫌にふるまい、女三の宮こそ光源氏の正室として不足のないお方であり、自分としてはまだ子供供した気分がぬけないせいか、この若い内親王と仲よくおつきあいさせていただきたいのだと言うのに対して、中務や中将の君という女房たちが、目くばせしながら「あまりなる御思ひやりかな」と言う、その文言をどのように読み取るべきか、というのが眼目であった。

その文言は、現代語に言い換えるならば、先方（女三の宮）に対し  
てあまりにも寛大にすぎるお心遣いというものです、ということに

なるだろう。腹心の女房として、紫の上のこれまでの地位を脅す女三の宮、紫の上よりも身分素性ともに断然別格であり、大々的な儀式をもって六条院に入来したこの内親王方に対抗していきり立つ自分たちからすれば、あまりにもおおらかすぎる主の女君の態度について切齒扼腕せずにはいられない、そうした思いをこの文言に読むことが誤りであるはずはないが、同時にそうとばかりは読み過ぎることのできない思いもこもるのではないかと私は考えたのであった。

いったい、この中務や中将の君というのはいかなる女房なのか。物語の本文によれば「あまりなる御思ひやりかな、など言ふべし」とある、すぐ次に、

A（中務・中将の君へ）昔は、ただならぬさまに（源氏ガ）使ひ馴らし  
たまひし人どもなれど、年ごろはこの御方（紫の上）にさぶらひ  
て、みな心寄せきこえたるなめり。（4・六〇）<sup>第2</sup>

と語り添えられている。かつては源氏と情けを交わした仲であるけれど、現在は、長年にわたって紫の上に心服する女房であるというので

ある。源氏の情人から紫の上付の女房へ、それはいつの時点の、どのような事情あつてのことであろうか。

年立のうえでは十四年前の「須磨」巻において源氏が京を離れようとする際に、

B わが御方の中務・中将などやうの人々に、つれなき御もてなしながら、見たてまつるほどこそ慰めつれ、何ごとにつけてかと思へども「命ありて、この世にまた帰るやうもあらむを、待ちつけむと思はむ人はこちら（紫の上）にさぶらへ」とのたまひて、上下みな（紫の上ノ許ニ）参うのぼらせたまふ。（2・一六九）

とあつた。中務や中将の君などにとって源氏の冷淡な仕向けが恨みであるというのは、彼女たちが並みの女房ではなく、源氏と情交関係のある身でありながらも源氏への思いをみずから抑え込むほかないからである。せめて身近に源氏の姿を目にすることで己れの心をなだめるほかないのだが、その源氏が京を離れるとなるとこれからいったい何が生きるうえでの支えとなるか、そうした彼女たちに対して、源氏は自分の帰還する日を待っていてくれるのなら、それまで紫の上を主人として仕えてほしいと言い、紫の上に付属させたというのである。

二年後、「明石」巻で源氏は帰還した。朱雀帝から冷泉帝へと治世の交代があり、内大臣となって体制を領導する立場になった源氏は己れの沈淪の期間を耐えた人たちに報いた。「漂標」巻には次のごとく語られている。

C 二条院にも同じごと待ちきこえける人をあはれるものに思して、年ごろの胸あくばかりと思せば、中将・中務やうの人々には、ほ

どほどにつけつつ情を見えたまふに、御暇なくて、外歩きもしたまはず。（2・二七四）

さきに見たように、「若菜上」巻には「昔は、ただならぬさまに……年ごろはこの御方にさぶらひて、みな心寄せきこえたるなめり」と語られていたが、しかしながら紫の上付属の女房となってからも源氏との情交関係が絶えたわけでもないようである。

## 二

いったい、このような女房——主の君に、あるいは主の君の妻室に仕えつつ、主の君と情交関係にある女房は召人と呼ばれていたが、この召人なる存在を組上にのぼせた阿部秋生氏の「召人について」（『日本文学』昭31・9、後に『源氏物語研究序説（上）昭和34に吸収』は規範的な論文であつたといえよう。氏は『源氏物語』のみならず『栄花物語』『大和物語』『蜻蛉日記』『宇津保物語』等にも召人と称される女性たちに関する記載を博搜し、克明に検討して次のごとく総括された。

(1) 女の方は、男の家又はそれに準ずる家の女房である。

(2) 男女相互の愛情関係を基礎にして始まるものである。

(3) 事実上妻と同様であるが、女房であることに変わりはないから、同居をしてゐる。又妻のやうに家政を支配することは勿論、妻の如き待遇を求めることはできない。

(4) 社会的に公認されてゐる男女関係ではない。人目を忍んでの関係であるから、けしからぬことであり、殊に北の方格の女性のある家庭内では、非難されてもやむをえない。

(5) 北の方格の人は、夫に、こういふ関係の生じた時、それを一々目に角たてることはよくないとされてゐた。やむをえない愛情関係として、黙認する方がいと考へられてゐたらしい。

(6) 誰が召人であるかは、家庭内の者は勿論、外部の者にも知られてゐたが、そのことにはふれないといふのが常識であつたやうである。<sup>註3</sup>

阿部氏は、また次のように説かれた。

今日からみれば、その事實はありながら、社会的には完全に抹殺されてゐた男女関係といふものがあつたのである。それは同時に、その召人である女房の人間性を抹殺するものと思はれるのだが、彼女等は、抹殺されることを何の不思議もないことと考へてゐたやうである。<sup>註4</sup>

長々と引用させていただいたが、いかにも根拠となる資料を博搜し、周到に検討されたうえで、以上のごとき説述にはほとんど異論の余地はない。

思い起こされるのは三田村雅子氏によつて書かれた「源氏物語における形代の問題——召人を起点として——」（『平安文学研究』二―四、昭45・2）という論文である。源氏物語のほかには類例を見ない「形代の思想」について召人の役割がみごとに追求されているといえよう。

氏は、源氏が正室葵の上の死後、葵の上付の女房で源氏の召人である中納言の君とともにありし日の故人を偲ぶ条（「葵」2・五二）にもとづいて、「中納言を愛することが亡き人への挽歌になると固く信じてでもいるかのよう」といい、「この場面では葵上の女房たちの集団が主人

公となつてゐる。その悲しみにくれた人々の中で、この中納言の君が、一時源氏の愛を受けたことがあるだけに、一層深く、源氏の心の變を理解できる者として置かれたという色彩が強いようである」と説かれ、また源氏が都をあとに須磨に退去する直前、別れの挨拶をすべく右大臣邸を訪れ、その夜、中納言と聞と共にする条（「須磨」2・一五九―六〇）にもとづき、「葵上の身代りとして右大臣家に義理を果す様なニュアンスがなくもない」とまで述べられた。三田村氏は、さらに紫の上死後の中將の君という召人の役割に触れて（「幻」4・五一―、五一三）、それを葵の上死後の源氏と中納言の君との関係の再現であるとし、彼女もしよせん亡き紫の上を哀傷するためのよすがとして登場するのであり、「ただ形代として都合のよい面がその都度、その都度付加されるだけの人物と言つてよいであらう」と述べられた。

いかにも、形代の思想をもつて動員される召人たちはどこまでも道具的な人形であるといえよう。おしなべてその出自、素姓は捨象されており、物語の世界のなかの現実に入り込まれて個々その人生を時間的に紡ぐことなどありえないのである。

たとえば、前記「葵」巻と「須磨」巻の中納言の君は、これよりさき「帚木」巻において「中納言の君・中務などやうのおしなべたらぬ若人」とあり、源氏が宮中の宿直所の「雨夜の品定め」の翌日、左大臣家に退出をした折、葵の上との気づまりな関係を、彼女たちに対する「戯れ言」で紛らわす相手として登場していた。「若人」とあるから源氏とは同年齢と見てよからうが、紫の上の死後の「幻」巻において「中納言の君・中將の君など御前近くて御物語聞こゆ」（4・五一〇）

とある条の中納言の君が、さきの「帚木」「葵」「須磨」の巻々の中納言の君と同一人であるとすれば、彼女はもと左大臣家の女房であつたのが源氏のもとに仕えるようになったことになるが、そうであるならいま五十路の古御達ということになる。

しかしながら、一方、この中納言の君と併記される中将の君については、同じ「幻」巻で、源氏が嘆き明かす曙、ながめ暮らす夕暮などに、側近に侍する女房たちを相手の物語に時を過ごしている、とあつて、

D 中将の君とてさぶらふは（源氏が）まだ小さくより見たまひ馴れにしを、いと見たまひ過ぐさずやありけむ、（中将の君へ）いとかたはらいたきことに思ひて馴れもきこえざりけるを、かく（紫の上が）亡せたまひて後は、その方にはあらず、（紫の上が中将の君へ）人よりことにらうたきものに心とどめ思したりしものを、と思し出づるにつけて、（源氏へ）かの御形見の筋をぞあはれと思したる。（4・五二二―三）

とあり、また祭の日の条には、

E 中将の君の東面にうたた寝したるを、歩みおはして見たまへば、いとささやかにをかしきさまして起き上りたり。頬つきはなやかに、にほひたる顔をもて隠して、すこしふくだみたる髪のかかりなど、いとをかしげなり。（中略）葵をかたはらに置きたりけるをとりたまひて、「いかにとかや、この名こそ忘れにけれ」と（源氏が）のたまへば、

さもこそはよるべの水に水草めけふのかざしよ名さへ忘るる

と恥ぢらひて聞こゆ。げに、といとはしくて

おほかたは思ひすててし世なれどもあふひはなほやつみ犯すベ  
き

など、一人ばかりは思し放たぬ気色なり。（4・五二三―四）

とあり、これらの文章を読むかぎり、この中将の君は前記「若菜上」巻において中務と相並んでいた中将の君と同一人とは思われまい。「若菜上」巻の中将の君は前記のように「須磨」巻以前より源氏の情を受けた召人であつたし、「葵」巻において、葵の上の死後、左大臣家において服喪ののち自邸二条院に帰つてきた源氏の夜伽に奉仕する女房でもあつた（2・六二二）。従つて「幻」巻の中将の君がもし右の中将の君であるとするれば、やはりいまはかなり年齢の古女房でなければならぬ。「幻」巻の中将の君は前掲の文章（E）に見るかぎり、十分に源氏をして執着させるに足る若女房といった印象であることは否定しがたからう。この中将の君にせよ、さきの中納言の君にせよ、比較的接近して登場するのであればともかく、前後同一人物であるかないか詮索するにも当る必要はないというべきである。その呼称は、敢えていえば普通名詞的に、非人格的に、ある一定の役割を演ずる存在にすぎない。三田村論文において、「形代の思想」のうえに召人の意義づけられていたのがいかにもとうなずかれるのである。

### 三

しかしながら、召人たちはただそうした役割を演じさせられる人形にすぎないのだろうか。かつて和辻哲郎氏によつて書かれた記念的論

文「源氏物語について」(『思想』大正11・12。『日本精神史研究』大正15所収)のなかに次のとき文言がある。「何人も認めるごとく、この物語に現われる主要な女の多くは、愛人の独占を欲するものである。そこから彼らの苦しみも生ずる。いかに多妻が公認せられる時代でも、恋に内在するこの独占の要求はいかにもし難い。」これは主人公光源氏が多くの女性たちの要求にまともに応ずるには、一人格としてはとうてい堪ええないものであることを強調する文脈のなかの文章であるが、ここに述べられているかぎりではいかにもとうなずくほかない。

人性は制度にどれだけ馴致するものであるか。社会的通念としてはそれが疑うべからざるものでありながら、個々人のかけがえない経験や欲望がそれによって律せられるにはあまりにも切実であることを源氏物語は語り極めているといえよう。和辻氏は「主要な女性の多くは」と限定しているが、さまざまの巻々におけるヒロインとして源氏にかかわる女性たちはともかく、前記の召人たちの心情はどうなのか、その心内に探りを入れてみるべきでないだろうか。

ここに朱雀帝の承香殿女御の兄、東宮の伯父にあたる鬚黒大将に「御召人だちて仕うまつり馴れたる木工の君、中将のおもとなどいふ人々」がいる(『真木桂』3・三五)。いったい、玉鬚の懸想人として登場してきた鬚黒大将は、玉鬚にとってはもつとも気乗りせぬ人物であったが、彼は玉鬚の侍女の手引によって玉鬚を手中におさめたのであった。大将の玉鬚への一途の執心は、自分より年上の、しかも神経病をわずらう北の方との仲がまったく冷えきっていたことと表裏している。やがて大将は、北の方に対してまことに酷薄というべきか、同じ邸内

に玉鬚を迎え入れる件を一方的に切り出し、強引に説得しようとするが、堪えきれなくなった北の方はついに精神錯乱して、伏籠の火取を大将に振りかけるといふ行為に出た。この夫婦仲の破滅はかくて決定的な段階に立ち至ったのである。大将の心は一段と玉鬚に傾くことになった。火取の火によって焼け焦げた衣装を脱ぎ換え、身を清めて玉鬚のもとへ出かけようとする大将に奉仕する木工の君と大将との応酬が次のように話られている。

F 木工の君、御薫物しつつ、

「ひとりゐてこがるる胸の苦しきに思ひあまれる炎とぞ見し  
なごりなき御もてなしは、見たてまつる人だに、ただにやは」と、  
口おほひてゐたる、まみいとしたし。されど、いかなる心にてか  
やうの人にも言ひけん、などのみぞ(大将ハ)おぼえたまひけ  
る、情なきことよ。

「うきことを思ひ騒げばさまざまにくゆる煙ぞいとど立ちそふ  
いとことのほかなる事ども、もし聞こえあらば中間になりぬべ  
き身なめり」と、うち嘆きて出でたまひぬ。(3・三六〇)

後の記事に、北の方が実家式部卿宮邸にひき取られていくときに、中将のおもとは共にこの邸を去っていったが、木工の君は、「殿の御方の人にてとどまるに」とあるように、彼女は大将付の女房であると知られる。やがてこの邸に迎え入れられる玉鬚と大将との夫婦生活に余儀なく奉仕しなければならぬ、それだけに、この条における木工の君と大将との贈報は注意されよう。

類似の場合として思い起こされるのは、後の「夕霧」巻において落

葉の宮に心を奪われた夕霧と北の方の雲居雁との応酬である。身づくろいも美々しく化粧して落葉の宮のもとへ出向こうとする夕霧を見送るほかない雲居雁が、夕霧の脱ぎ置いた単衣を引き寄せて「なるる身をうらむるよりは松島のあまの衣にたちやかへまし」と詠嘆するのに對して、夕霧は「松島のあまの濡れぎぬなれぬとてぬぎかへつてふ名を立ためやは」と、いわば捨てぜりふを残して立ち去るのであった(4・四六一)。ともども異例のこととして、女の側からまず訴嘆されていることに注意したのである。もともと、玉鬘のもとへと急ぐ鬘黒大将の場合は、北の方が一対一ではありうべくもない異常な状態であり、されば、木工の君が代つて恨みを訴える、その点では彼女は便宜的道具的に起用されているのだといえるかもしれないが、しかしながら諸注ひとしく指摘するように、木工の君は北の方の立場、心情の代弁者であることを突き抜けて、わが思いを大将に突きつけている。もとより「口おほひてあたる」のは大将に對して詰問せずにはいられなかったものの、召人の分際を踏み越えることへの憚りから口を覆うのであろう。と同時に、それは大将を誘引しようとするしぐさなのでもあった。王上琢彌氏『源氏物語評釈』には「大将の氣を引いているのだ。北の方ばかりではない、わたしだってやけてますわ、と言うのである。口をおおうと目や肩や顔や髪が目立つ」と述べられている。<sup>註</sup>「まみいとしたし」が、そうした木工の君の美貌を強調するものであるとするのがおよその通説であるのうなずかれるが、いささかこだわりた思がある。『河海抄』は、この「まみいとしたし」について「傷」と注しているが、契沖『源註拾遺』では、この『河海抄』の注を引いて「ほ

めたる詞也」と加え、「今案、いたしは痛にて見るに心いたましき也。北方の事をいふに木工君が下心ある故也。ほめたる詞にはあらず」と注している。これに對して宣長『源氏物語玉の小櫛』は「拾遺誤也」とした。宣長は「若紫」巻の注に「いたしは、さしもあるまじき物の、思ひの外に、ほどよりはよきを、ほめたる詞也。他巻に見えたるも、皆同じ意也」と説いている。宣長説に従えば、口を覆って大将を見つめる木工の君の眼差しが思ひのほかに魅力をたたえていることがあらためて賞美されていることになるが、しかればその賞美の主は大将ということになるのだろうか。しかし、玉鬘のもとへと一途に逸る心からすれば、この木工の君のような女にかつて手を出したことが今となつては悔まれるものでしかない大将の面持が「されど……」以下に語られている。「いとしたし」は大将の心というよりは語りの手の目に木工の君が賞美されているのだといえよう。「情なきことよ」という大将非難の文言とひびきあうことになる。「うきことを……」の大将の歌の「さまざまに」には北の方と木工の君と両方が指示されているであろう。しかしながら、ここでは北の方という存在は後景は消えて、木工の君は北の方の代弁者であるよりは自身大将と對峙することによっていたわしく振り捨てられる一人の女の姿を際立たせているというよう。この状況のうえからいえば「いたし」の語義をそれじたいはともかくとして契沖の注が味読されることにならないだろうか。

いったい、木工の君が歌の贈答の当事者、しかも女の側からの訴えに男が応じさせられているということに、あらためて注目したいのである。歌は、発想や形式の強固な伝統的約定に従うことによって、他

者との心的連帯をなりたしめる非日常的言語であるというよう。そうした歌の贈答においては、詠者は互いに身分、地位、経歴から自由に、ことばそれじたいによって保証されつつ真向いてありうるだろうが、じつはそうであることとさしちがえに、両者の断絶・背反の際立つ場合の招来をも避けがたいのである。なぜならば歌は他者との流通を願う現実からの切実な要求に根ざすものであるがゆえに。そこにかえておのずから両者の現実における関係が際立つことになるからである。木工の君の召人としての悲しいありようがそこには彫り出されているといえよう。

#### 四

召人と主の君の歌の贈答は、前記「幻」巻の祭の日の、中将の君と源氏との間にも交わされていた(本文E)。この中将の君は、亡き紫の上の正日の宵に源氏の勤行に奉仕していたが、紫の上を偲ぶ歌を書きつけてあった彼女の扇に源氏が自分の歌をも書き添えた由も語られている(4・五三〇)。前記の三田村論文によれば、この中将の君も「ただ形代として都合のよい面がその都度、その都度付加されるだけの人物」ということになるが、氏はまた、この「幻」巻の中将の君について「殆ど何の意味も感情も示そうとせず、葵の日になまめかしい姿態から紫上御正日の宗教的悲しさまで、源氏のとりなし次第で激しい振幅を示す女性である」とも述べられた。いかにも、「源氏のとりなし次第で」なのかもしれないが、私の局でうちくつるが中将の君の、源氏の目にさらされる匂いやかにはなやいだ姿は、紫の上の形代である

ことから解放された一個の魅力的な女性のそれであろう。源氏の入来に対して衣装をととのえ身づくろいする彼女のかたわらの「葵」、それは祭の日の挿頭として用意されたのではあるけれど、源氏との「逢ふ日」を期待し、それが源氏の目に触れることを願うものでもあっただろう。これを見て源氏ははたして反応を示した。「いかにとかや、この名こそ忘れにけれ」、ずいぶん久しくそなたとの交わりを絶っていたものよ、と言う源氏に対する中将の君の歌の意味するところは、いかにも長い間お見限りでしたが、ほかでもない今日の祭の挿頭の葵(逢う日)までお忘れになるとは、という挑発である。「恥ぢらひて聞こゆる中将の君の態度が源氏の心を揺すった。およそ思い捨ててしまった世々男女の仲であるけれど、葵を目にしては、「逢う日」とあつては)、これを摘んでしまいたい(そなたと罪を犯したいもの)」と応ずることになる。亡き紫の上を追慕しつつ、出離を目ざして勤行にいそしむ日々でありつつも、中将の君「一人ばかりは思し放たぬ気色なり」、源氏はこの召人相手の女犯の罪を犯したことになる。玉上氏は、「道心の生活に矛盾すると考えられるべきことだけれども、中将の君が女房だからかまわないのであろうか。紫の上を追慕して喪服を脱がないこの女房は、紫の上に従属するものとして、源氏の紫の上追慕の情に重なる事となるのであろうか。おそらくは二つながら理由となるであろうが、源氏の紫の上追慕の心を主調とするこの巻の主題から言えば、後者の理由こそ重いであろう」と述べている。この「後者の理由」は三田村氏の形代としての捉えかたに恰当するといえようが、前記、木工の君と鬚黒大将との場合と同じように、中将の君のほうから、しかもそこ

では紫の上の影をとどめぬ詠みかけに源氏が応ずるといった形の贈答であることに注意したのである。「女房は、主人からすれば性欲の対象とはなっても、恋愛の対象にはならない。しかし、この場合の源氏は、性欲の問題だけではない感じがする」とも玉上氏は説いている。

一人格ではありえない召人ゆえに紫の上哀慕一筋のこの「幻」の主旨と矛盾することなく、源氏との情交関係を取り結ぶことができたということになるのであろう。源氏にとって中将の君に情をかけることがいかほどの歩調から逸脱するものではありえぬとしても、彼女の側からすればそのことを逆手にとってわが思いを訴え、源氏の心を己れに向かわせたということであろう。

## 五

さて、このような中将の君とは同じ呼称をもって、その内面をあらわに登場するのが宇治の物語の八の宮の召人と考えてよいであろう女性であった。最後のヒロイン浮舟の母である。

八の宮の北の方は二人の娘（大君・中の君）を生んだが、中の君出産の直後に心を残して死去した。八の宮が宇治の地に隠棲して世に忘れられた境涯に沈淪するに至った経緯、また、この八の宮を法の師と慕った薫が大君に恋着するに至った経緯、それらについていま触れるにも及ぶまい。当面の中将の君についていえば、彼女は北の方の姪であり、上臈女房として八の宮家に仕えていたのだが、北の方の死から五年後に八の宮の娘浮舟を生んだのである（「宿木」5・四四七〜八）。いったい八の宮は北の方に先立たれて後、諸方から勧められる

再婚の縁談にも耳を借さず、「心ばかりは聖になりはてて」「例の人のさまなる心ばへなど戯れにても思し出でたまはざりけり」（「橋姫」5・一一三）と語られていた。そうした俗聖の清高な日常に徹していたはずの八の宮でありながら、中将の君とは内々に情交を重ねていたことになるが、しかしそこに撞着を指摘する必要があるまい。前記「幻」巻において、紫の上に先立たれた源氏が一途に故人を追慕しつつ勤行にいそしむ日々のなかに、召人中将の君との情交の一齣がさしてはさまれていたことも思いあわせられよう。八の宮が俗聖にして中将の君の腹に浮舟を生ませた、そのことについて物語の世界にはいささかも咎めだてする語りくちを見いだすことができないが、生まれてきた娘をわが子として扱うことを拒み、自分を二度と近づけることのなかった八の宮のもとを去って東国に下って常陸介の後妻におさまった中将の君の行蔵に注目するとき、召人の抱かせられた痛切な思いをまざまざと読むことができればよい。

彼女は受領職を歴任して蓄積した莫大な資産にものいわせて風流がる無教養な夫を侮蔑し、かつては宮家の女房であっただけに身につけた風儀を持して連れ子の浮舟を庇護しつづけた。しかしながらその浮舟の前に現われた格好の求婚者であった左近少将との縁談は浮舟が介の実子でないことゆえに不調に終り、しかもその少将が介の実の娘の夫となって通ってくるという事態となったために、中将の君は浮舟の身柄をいまは匂宮の妻となっている姉、中の君に委ねたが、その邸で匂宮に迫られた浮舟は、やがて薫によって宇治に住まわせられることになったのである。



右のような変転する浮舟の境涯に大きく作用するのは母中將の君の差配であるといえよう。いったい薫と浮舟との結縁は、大君に先立たれた後、その人の倂を中の君に求めた薫が中の君の口からその存在を知らされたからだ、浮舟を所望する薫の意向に接した中將の君の反応は、まず高貴な相手にそぐわぬ、人数ならぬわが身分への嘆きであった。前記のように左近少將の背信をほとんど呪咀するほかなかった中將の君であつたが、浮舟の真価に盲いているあつた情知らずの少將ではなく薫のようなお方に運をまかせたらよろしいと言ひ出す乳母に対して次のように語っている。

G あな恐ろしや。人の言ふを聞けば、年ごろ、おぼろけならん人を見じとのたまひて、右の大殿、按察大納言、式部卿宮などいとなむごろにはのめかしたまひけれど聞き過ぐして、帝の御かしづきむすめ（女二の宮）を得たまへる君は、いかばかりの人かまめやかには思さん。かの母宮（明石中宮）などの御方にあらせて、時々も見むとは思しもしなん、それ、はた、げにめでたき御あたりなれど、いと胸いたかるべきことなり。宮の上（中の君）の、かく幸ひ人と申すなれど、もの思はしげに思したるを見れば、いかにもいかにも、二心なからん人のみこそ、めやすく頼もしきことにはあらめ。わが身にては知りなき。故宮（八の宮）の御ありさまは、いと情々しくめでたくをかしとおはせしかど、人数にも思さざりしかば、いかばかりかは心憂くつらかりし。（夫常陸介ハ）この、言ふかひなく情なく、さまあしき人なれど、ひたおもむきに二心なきを見れば、心やすくて年ごろをも過ぐしつるなり。をりふし

の心ばへの、かやうに愛敬なく用意なきことこそ憎けれ、嘆かしく恨めしきこともなく、かたみにうちいさかひても、心にあはぬことをばあきらめつ。上達部、親王たちにて、みやびかに心恥づかしき人の御あたりといふとも、わが数ならではかひあらじ。よろづのことわが身からなりけりと思へば、よろづに悲しうこそ見たてまつれど、いかにして、人笑へならずしたてまつらむ（6・

#### 二九（三一）

まさにこの少將の君の慨嘆にこそ召人のやるかたない心内が余すところなく露呈されているといえよう。彼女によれば、もし薫の求めに応じて浮舟をさし向けたところで、権門豪家からの縁談にまるで耳を借さず帝の婿となつたような薫から一人前に扱われるとはとうてい考えられない、母の女三の宮のもとに女房として仕えさせ、ときたま情をかけていたぐくらしいが関の山というものの、いかに薫が申し分の高い高貴人ではあらうと、その程度な扱いであつたら、いかに苦痛であることか、匂宮に迎え取られて世間で幸い人といわれている中の君にしてすら、つねに宮の移り気が憂えの種である様子を見ると、妻一人を二心なく守ってくれるような夫こそが無難であり頼りがいがあるというものの、八の宮の情けを受けた自分の経験に照らしてそう思うほかない、八の宮は情けに厚くりつばな主君ではあつたけれど、この自分に対しては人並みの扱いでもなかったことがどんなになさけなくつらいことがあつたか、それに比べると常陸介はつまらない夫であるが自分だけを一筋に守ってくれたのだから、どんなに諍いをしたからとて妻の座の不安もなかった、いかにすばらしい高貴な方々に縁づいたと

しても、こちらが不相応な身分なのは、どうなるものではない、……。このように述懐する中将の君が、その考えを翻して浮舟の身柄を薫に委ねることになった経緯については当面組上にのぼせるにも及ぶまいが、考えを翻したということは考え方が変わったということではない。八の宮の娘であり、その点では姉たちに劣るものではない浮舟を姉たちと同等の地位に上昇させることによって、恨み、屈辱を生きたわが人生の無慚なありようを消却するものでありたいと願うのであるといえよう。中の君に浮舟の身柄を委ねるに際して彼女は「故宮（八の宮）の、つらう情なく思ひ放ちたりしに、いとど人げなく人にも侮られたまふ、と見たまふれど、かう聞こえさせ御覽ぜらるるにつけてなん、いにしへのうさも慰みはべる」（6・四三）と述べているが、やがて薫のもとへ浮舟をさし出すつもりになり、そのことで手配を依頼する折の文言には、薫のような高貴人の側近に侍らすのは張り合いがあり、若い女性ならこの君を慕わずにはいられまいけれど、人並みでない浮舟の身では、「物思ひの種をやいとど蒔かせて見はべらん」（6・五〇）という危惧を禁じえないのである。彼女はさらに

H 高きも短きも、女といふものはかかる筋にてこそ、この世、後の世まで苦しき身になりてはべるなれ、と思ひたまへはべればなむ、いとほしく思ひたまへはべる。（6・五〇）

と慨嘆している。前記の和辻氏の文言も思いあわせられるのである。なお中将の君の言動についてはこれ以上追尋する必要はあるまい。召人のありようは前記の阿部氏の総括に尽きるとしても、しかしながら制度として、通念として、人数にも入らぬはずの存在でありつつも、

彼女たちが、あるべき女性として、人間として生きることを禁圧された苦悩をいかに人知れず抱えるものであったかを余すところなくものがたるのが八の宮の召人中将の君の行蔵であるといえよう。翻って、その心内に立ち入って語られることなく登場していた数々の召人たちの姿があらためて見直されてくるのである。

たとえば「須磨」巻で源氏が都を離れるに先立って左大臣邸を訪れ、その夜、中納言の君と聞を共にしたとある条、三田村氏が「葵上の身代りとして左大臣家に義理を果す様なニアンスがなくもない」と述べられたことはさきにも触れたが、その翌朝の別れの場は次のように語られている。

I 明けぬれば、夜深う出でたまふに、有明の月いとをかし。花の木どもやうやう盛り過ぎて、わづかなる木陰のいと白き庭に、薄く霧りわたりたる、そこはかとなく霞みあひて、秋の夜のあはれに多くたちまされり。隅の高欄におしかかりて、とばかりながめたまふ。中納言の君見たてまつり送らむとにや、妻戸押し開けてゐたり。「また対面あらむことこそ、思へばいと難けれ。かかりける世を知らで、心やすくもありぬべかりし月ごろ、さしも急がで隔てしよ」などのたまへば、ものも聞こえず泣く。（2・一五九―六〇）

まさに典型的な後朝の別れの場面である。しかし、ここでは将来の再会も予測のつかない離別の折でもあるだけに、男女それぞれの思いは切実をきわめるものがあるう。もとより中将の君は三田村氏の述べられるように葵上の形代であるがゆえに源氏からいたわられるので

あろうが、源氏からかけられる言葉に對して、ただ「ものも聞こえず泣く」のは、自分が召人の分際であつてみれば応ずべきいかなる言葉をも発しえないのであろう。せいじつぱいの、それだけにただ「泣く」という身体表現にかへつて張り裂けんばかりの胸裡が忖度されるのである。

またたとえば「初音」巻の元日、六条院の「生ける仏の御国」とまで讃えられる春の殿で初春を祝う女房たちの集いの場に顔をのぞかせた源氏が、年の初めとして皆それぞれに願ひごとがあろう、少し聞かせておくれ、わたしもそなたたちに祝言をさせてもらおうではないか、と言う。そうした源氏の姿を初春のめでたさと拝見する女房たちのなかに「我はと思ひあがれる中将の君」が「かねてぞ見ゆるところを鏡の影にも語らひはべれ、私の祈りは、何ばかりの事をか」と申し述べている。私は正月鏡餅を相手にして殿の千歳の齡を寿いでいます、自身のための祈りは何ほどもいたしておりません、と言うのだが、この言葉の裏にこもるのは源氏への恨みである。彼女は源氏の情けをことうむる身である、その点では他の女房たちと別格という思いがあるが、そのことと表裏して、いかに源氏への思いが深かろうとも召人としての規矩から自由ではありえない悲しみをいかんともしがたいのである。召人の言動がどのような心内を抱え込むものか、不注意に見過ごさない一、二例に触れたのだが、さて冒頭に述べたように「若菜上」巻における中務や中将の君の「あまりなる御思ひやりかな」という言葉について立ち戻ると、それは単に彼女たちが味方する紫の上の、女三の宮に對する寛大な態度への齒がゆい思いに発するものとのみ片付け

られまいとするのが私の考えであつた。彼女たちの發言の語られるすぐ後の記事には、他の妻妾から紫の上のもとに「いかに思すらむ。もとより思ひ離れたる人々はなかなか心やすきを」という見舞いが寄せられたとあり、それに対して紫の上の「かく推しはかる人こそなかなか苦しけれ」という心内が語られていることも思いあわせられるのだが、女三の宮の興入れに對して、そうした事態をいかにも歡迎するかのようにつるまう紫の上の態度は、これまで最高に待遇されていただけに、そのために下風に立つことを余儀なくされていた他の妻妾に對して、わが面目にかけて誇り高く己れを持する構えにはかならなかつたといえよう。そうした紫の上の心底を中務や中将の君が透視できなかったはずはない。彼女たちがいかにその腹心として紫の上に仕える身であつても、紫の上が源氏の情愛をほとんど独占してきたために自分たちへの顧みを期待すべくもなかつたとすれば、この主の女君の絶對的でさえあつた妻の座の揺れるいま、その内心には微妙複雑なものがあつたと見るのがごく自然ではなからうか。

私はかつての小稿を結ぶにあたり「書かれてある細部は文学作品の内部でたがいに關係をもつて存在している。逆にいえば、文学作品の一つ一つの細部は、作品という場において存在しているので、前後關係から取り出して、孤立させると、ある國語の文法上の用例になることはできても、文体上の価値は、あらゆるレベルにおいて、失われてしまふのだ」という篠沢秀夫氏『文体学原理』（昭29）のなかの文言を引用しておいた。「あまりなる御思ひやりかな」という召人の言葉をどう読むか、ということに固執したのは、源氏物語の読み解きの姿勢に

かわることもあった。

注1 「あまりなる御思ひやりかな」について——文体の問題一つ——

(『武蔵野文学』38、平成3)

注2 日本古典文学全集『源氏物語』の巻数・頁数。以下同じ。

注3 『源氏物語研究序説(上)』三六二―三頁。

注4 同右三六九頁。

注5 『和辻哲郎全集』第四卷一四二頁。

注6 『源氏物語評釈』第六卷二三五頁。

注7 同右第九卷一五五頁。

注8 注7に同じ。